五省会ニュース

発行所
特定医療法人五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41−2481(代)
発行人　西能 正一郎

五省

一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥ずるなかりしか
一、気力に欠くるなかりしか
一、努力に憾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

一歩一歩と、開院三十周年

目標に向かって決意新た

二十日、いこいの村で記念式典

特定医療法人五省会西能病院は、開院三十周年記念式を三月二十日午後二時から婦中町いこいの村で職員が参列して挙行、決意を新たにした。引き続き、永年勤続者二十二人を表彰、西能理事長が記念講演を行った。このあと祝賀会を開いた。

西能病院は、昭和三十七年三月二十一日、富山市星井町で病床十九床職員八人の整形外科医院（西能正一郎院長）として産声をあげた。三十年の歳月が流れ、現在は百八十五床、職員百六十五人の大世帯になった。

昨年十二月末の患者累計は、外来が百四十七万八千余人、入院が百三十五万三千余人。これも皆様の温かいご支援と、ご利用いただいた賜物である。

これからも、〝信頼と奉仕〟をモットーに新しい時代の、より良い病院として、地域医療、福祉、健康そして明るい長寿社会に取り組み、夢を展らませていくことにしている。

地域と共に生きる　呉羽山から西能病院を望む

転機を乗り切って

西能 正一郎

今年の春分の日をもって、私が開業しましてから満三十年を数えることになりました。過去の開院記念の日に何度も書いたことがあると思いますが、整形外科医として勤務している間に、予想以上に澤山の患者さんにおつきあいいただきました。それで独力でやってみればどんなことになるのか試してみたいという単純な動機からの開業でありました。

現在のベッド数百八十五、職員数百五十を超える病院の状況は夢のような話であります。勿論この様な状態になるまでの三十年間は常に順風満帆で苦労がなかったと言えば嘘になります。その時その時で色々と苦心もし、つらい思いも多々ありました。

人間と言うものは苦しい、いやなことは忘れやすい動物でありますので、栄光に身をゆだねるしあわせの日々だけがクローズアップされがちであります。

今までも良かったことだけに焦点をあわせてこのような文章を書いて来たように思います。今回は三十年という節目の年でありますので、今思い出せる苦しかったことの二、三について触れてみたいと思います。

整形外科の私的医療機関は北陸では私が最初でありました。まず現われたハードルは、整形外科と言う科はどんな病気を診る医者であるのか、一般の皆さんには全く理解されていなく、開業はしたものの患者さんがさっぱり来てくださらないということでありました。

救急車などの工夫が功を奏してやがて多忙な日々を過ごすことが出来ましたが、それから数年して今度は市内に整形外科の同業者が次々と開業され、市場が急に騒がしくなったことであります。その頃には整形外科というだけの金看板はなくなりました。

整形外科で扱う疾患の中で何か専門的な機能を果さねばならないと考え、腰痛を主体とした脊椎外科に焦点をあて、病院の機能アップを図りました。この切り換えには十年はかかりましたが、それなりに診療圏は広がりほっと一息つける状態になりました。その次に現われた消防法にからむ病院の改築命令をクリアするために、増改築を強行し、今のような規模に膨れ上ってしまいました。

このような転機は数えればきりがありませんが、その都度、当時いた職員諸君が私を助けて努力をしてくれ、ご利用の患者さんに病院の機能を前向きにご理解、おつきあいいただいたお蔭であると、あつく御礼申し上げるものでございます。

脊椎外科で機能アップ

患者さんの前向きのご理解で

あすなろ

辞書によると「一昔」とは「昔の出来事というくらいの漠然とした時代の隔たりのこと」らしい。しかし江戸時代から庶民の間には「十年一昔」という言葉があり、十年を一つの目安にしていたようだ▼国の歴史も、人の歴史も十年を一区切りにしてみると変転の跡がよく見えてくる。たとえば日本の戦後史にしても昭和二十年…三十、四十、五十、六十年がそれぞれ一つの節目となって時代が動いていることがわかる▼西能病院が三十周年を迎えた。整形外科という言葉さえ珍しかった八人十九床の創設の頃。それが四階建ての押しも押されもせぬ「県内整形の雄」となった十年目。さらに五階建てに増改築、内科併設の西能病院として多彩な医療活動を開始した二十年目…▼はた目にも西能病院は、くっきりと濃く深いけじ目の線を印しながら今新しい三十年目を刻みこんだ。何を刻むのか。いや、何を刻まなければならないのか。それは西能病院に働くスタッフ一人ひとりが自分の胸に何を刻むかによって決まるだろう▼人も三十といえばもう一度足もとを見直し、固め直し、目標に向き直らねばならぬ人生の正念場だ。新しい希望と夢とともに忘れてならぬのは厳しい自省と初心であろう。孔子は「三十而立」といった。西能病院の而（じ）立の雄姿に心から祝福の拍手をおくりたい。

平成四年三月
特定医療法人 五省会

生きがいの長寿社会に、ご協力申し上げます

理事長 西能正一郎
常務理事 中永 久光
理事 西能 竑
理事 住 博司
理事 中尾 哲雄
理事 米田 寿吉
監事 石川 実
監事 筧田 英二
評議員 稲垣 忠一
評議員 大上紀美雄
評議員 尾山征一郎
評議員 神沢 幹夫
評議員 河上弥一郎
評議員 西能 綾子
評議員 西能 孜
評議員 坂本 重一
評議員 笹山真治郎
評議員 土田 亮一
評議員 古沢 富美
西能病院職員一同

家族ぐるみの付き合いが出発点

～地域医療と病院のあり方を考える～

開院三十周年を迎えた西能病院は、初心を忘れず、さらに内科を中心にした地域活動と、専門の脊椎外科の両輪で、きめ細かい医療を目指しております。地域の皆さんの福祉や健康の保持にも力を入れていきます。また、すべてのお年寄りが健康で、生きがいを持ち、安心して暮らせる環境づくりに積極的に取り組んでいきます。そこで、地域医療と、これからの病院のあり方などについて、西能院長らに語ってもらいました。

新しい時代の病院づくりを話し合う㊧から中永、渡辺、山本、西能の各氏

出席者
西能病院院長　西能　竑
五省会常務理事　中永　久光
西能病院看護部長　山本　玲子
西能病院事務部長（司会）　渡辺　裕之

垣根を取り除いて生の声を
近くの頼れる病院が心強い

渡辺　90年代の新しい医療制度は高齢化社会の中で、いかにして地域に密着した医療を包括的に展開していくかが問われています。地域医療についての、その生じてきた背景、理念、さらに今後の展開について話し合って頂きたいと思います。

西能　診療に携わっていますと、地域医療の定義的なものより、患者さんや家族の皆さんとのふれあい、付き合いというものが、より実感いたします。いわば人間がおり、家族があって、「医療と家族ぐるみの付き合い」というヒューマン・ファクターが大切だと思います。

山本　訪問看護や入浴車サービスを通して強く感じたことは、近くに頼りになる病院があれば心強いということです。障害を持っている方や、お年寄りから「緊急のとき診てもらえますか」「夜間はいいですか」と、よく聞かれることがあります。

中永　高齢化社会の中で、これが医療だ、これは福祉だというんじゃなくて、医療・福祉・保健をあげて取り組んでいきたいと考えており、地域に密着し、地域に貢献できる病院にしたいと思っております。

地域とかけ離れた病院は成り立たない時代になっていると認識しています。

渡辺　家族ぐるみの付き合いという身近かなところに地域医療の出発点があるのではないかと思いますが、もう少し具体的にお願いします。

山本　地域医療はこうあるべきであると、定義されていますが、それよりも実践の中から生じてくるものではないかと感じております。人は家庭で生活するのが一番自然な姿であり、家の中でターミナルを迎えさせてあげたらと、誰もが感じるものではないでしょうか。

医師は幅広い常識を

西能　当院では過去に毎週土曜日を「医療相談の日」と設定し、理事長や私が担当してきましたが、あまりご利用されませんでした。ご存じなかった方もありますが、相談しづらかったようです。

いづれにしましても、相談の中身は、あらゆる病気からリハビリ、保健、予防と広範囲にわたりました。医師は幅広い常識を有したゼネラリストが要請されます。これらの幅広いゼネラリストの医師を養成するのも、地域医療を支えていく大きな要素だと思います。

中永　今、院長のお話しで、医療相談を利用いただけなかったということですが、確かに医師を含めて、病院の人には色々と相談しづらいということがあると思います。

地域の皆さんとお付き合いをするためにはまっさきに相談しづらい“垣根”を取り除くことだと思います。その“垣根”を取り除いてこそ、初めて患者さんや家族の生の声が聞えてくる。その生の声をフィードバックすると思うし、またフィードバックする機能を持っていなければならないと思います。

西能　“垣根”を取り除く意味において、院外に出ていくのは大変よいことだと思います。

事前に詳しく説明　訪問看護
入浴サービスは家庭医と連携

渡辺　院外へ出るといいますか、地域へ出向くということについて、訪問看護や入浴車サービスを担当しておられる看護部長から経験をふまえてお聞かせください。

山本　訪問看護からお話しますと、入院の段階から訪問看護を念頭において計画を立てるべきであります。勿論、担当医師の指示のもとに事前に家族とのコミュニケーションを深め、訪問看護の目的、訪問回数、家族の介護の仕方等について説明を行います。

また、入浴車サービスにつきましては、富山市民健康センター、ホームドクターとの連携をとり、入浴後に気づいたことをホームドクターに連絡して情報をフィードバックします。そうすることにより、当院、ホームドクター、患者さんや家族との間に信頼関係が生れ、患者さんを当院とホームドクターの両者で支えているとの安心感を与えることができます。

これが長く続いていくべきであると思います。

渡辺　院外へ出ることは、患者さんの段階から訪問看護を念頭において計画を立てるべきであります。

中永　これは、入院から訪問看護へ切れ目なく、患者さんの立場に立って、ご家族の介護の仕方等について説明を行うことが大切だと思います。

渡辺　先程も、ちょっと話がでました「地域に関する意識調査」から、どんなことがわかりましたか。

西能　さまざまなご要望、ご意見がありました。診療科について、整形、内科以外の診療科を増設してほしいという要望もありました。地域に貢献するためには、きちんとした体制で取り組む必要がありますので、今後の検討課題としております。先にもいいましたが、予防医学や人間ドックも大切です。

山本　これからは産業医活動や企業健診も大切です。当院にはMRIがありますので、特徴のある人間ドックのメニューをつくるのも良いと思います。

中永　アンケート調査によれば、人間ドックや健康診断を受けていない人が非常に多く、また受けたいと思っている人も非常に多いことがわかりました。

山本看護部長

西能　地域医療をすべて当院で行うには当然限界がありますので、地域の医療機関と連携をとっていくのも重要です。さらに当院と富山医科薬科大学とはコンタクトがありますので、大学を利用させ頂けます。

山本　整形、内科以外の患者さんには適切に他の医療機関を紹介することができます。

中永　近い将来、老人訪問看護ステーションは当院の医師だけでなく、他の医療機関の医師の指示でも動けるものです。

そして、入浴車や救護班活動を含めて組織的に運営する体制をつくります。これによって、地域の皆さんのお役に立つことができるのではないかと考えております。

西能　地域の皆さんに親しまれ、頼りになる病院になるためにも、医療・保健・福祉そして予防医学を含めた包括的な総合システムを全職員一丸となって作っていきたいと考えています。そして、心の通じる全人間的な治療を心がけていきたいと思っております。

渡辺　いろいろ有意義なお話を有難うございました。地域のみなさんが、安心して暮らせる環境づくりの大切さがよくわかりました。

地域と手を取り合って
納涼大会や運動会にも参加

渡辺事務部長

渡辺　地域の皆さんに当院を利用して頂くためには、先ず当院に何ができるかを知ってもらう必要があると思いますが…。

中永常務理事

中永　さきに広報委員会で、地域の皆さんからアンケートをとらせてもらいました。その結果、驚いたことは五十四年から行っている内科診療や六十三年から実施している休日診療が案外知られていないという事でした。

地域の皆さんに当院を知って頂くことが、いかに難しいかよく分かりましたので、これからは、あらゆる機会を利用するほか、地区の納涼大会や運動会にも参加して伺良くさせて頂きたいと思っております。

西能院長

西能　先程から地域という言葉がよく出ておりますが、一体地域とは、どのゾーンをいうのか、ちょっと整理しておかなければならないと思います。

私は地域とは、神通川以西の五福、桜谷、神明、そして梨雲苑のある呉羽辺りを念頭において計画しております。

中永　院長の意見は内科を念頭においた地域医療の地域で、整形の診療圏は富山県全域だと思います。

西能　整形は内科と比較すると、緊急性が少ないかも知れませんが、地域医療活動の一翼を担っているし、また担ってもらわないと困ります。

中永　五省会ニュースの正月号で、理事長が「内科を中心とした地域活動と専門医療の両輪で」と書いておられます。内科と整形外科の地域が重複し、また一部違っていて当然だと思います。

人間ドックや健康診断を予防医学の立場から

渡辺　先程から、ちょっと話がでました「地域に関する意識調査」から、どんなことがわかりましたか。

西能　さまざまなご要望、ご意見がありました。診療科について、整形、内科以外の診療科を増設してほしいという要望もありました。地域に貢献するためには、きちんとした体制で取り組む必要がありますので、今後の検討課題としております。先にもいいましたが、予防医学や人間ドックも大切です。

山本　仕事などの都合で人間ドックや健康診断を受けられなかった方々は予防医学の立場から是非受けて頂きたいと思います。

西能　地域医療をすべて当院で行うには当然限界がありますので、働きやすい病院の体制づくりが管理者として責務と痛感しております。

これからも、末永く地域の人々から信頼され親しまれる病院として存在するためには、医療技術の向上と、思いやりの精神が永遠のテーマとなるでありましょう。四十周年さらには五十周年に向けて、職員一同のご協力をお願いするとともに、関係各位のご支援、ご鞭撻をふろうしてお願い致します。

渡辺　最後に、今後の展開について伺います。

中永　最初に話しましたが、西能病院に電話すれば、医療であれ、保健であれ、福祉まで何とかして貰えるといわれるようにすることが肝要ではないかと思います。

山本　それはいい考え方だと思います。家で療養している方々は医療、社会福祉、生活環境などずべて不充分な状況下にありますし、今後どうすればいいのか、色々不安がありません。これらの不安を公的機関と私的機関がお互いに連携し合って、地域の実態に即した、きめ細かな活動をしていくことが大切だと思います。

中永　近い将来、老人訪問看護ステーション、在宅介護支援センターをつくる計画を立てています。老人訪問看護ステーションは当院の医師だけでなく、他の医療機関の医師の指示でも動けるものです。

そして、入浴車や救護班活動を含めて組織的に運営する体制をつくります。これによって、地域の皆さんのお役に立つことができるのではないかと考えております。

西能　地域の皆さんに親しまれ、頼りになる病院になるためにも、医療・保健・福祉そして予防医学を含めた包括的な総合システムを全職員一丸となって作っていきたいと考えています。そして、心の通じる全人間的な治療を心がけていきたいと思っております。

渡辺　いろいろ有意義なお話を有難うございました。地域のみなさんが、安心して暮らせる環境づくりの大切さがよくわかりました。

地域に予防医学の啓発を

第三点は、予防医学の啓発に努めることです。今だんだんと予防医学の時代になっています。厚生省では、病気になって医療機関にかかるんじゃなくて、病気にならないように日ごろから予防に力を入れるべきであるといっています。従って、当院の有する専門知識や技術などを地域の皆さんに知っていただき、利用していただきたいと思っております。

この三点を絶えず考えて、地域の皆さんのお役にたつ地域医療に取り組みたいと考えております。

包括的な総合システムを

医療の原点を再確認

西能　竑

開院三十周年を迎え、職員の皆様とともにお慶び申し上げます。

昭和三十七年三月二十一日は、小雪の舞うなかで、西能整形外科医院が誕生しました。丁度その日は、私の金沢大学医学部合格通知を受けた日でもあり、記憶に残る一日であります。

以来三十年、数多くの方々のご指導ご援助と、たくさんの患者さんのご利用、さらに、理事長を中心とした職員の努力によって、今日の医療法人・西能病院の姿に転身してまいりました。

私自身も当院に勤務してはやくも二十年となりました。最近では、二代目の院長を拝命し病院の運営と診療に追われる毎日であります。

さて、この三十年間に医療の環境は大きな変遷の流れがみられます。国民皆保険制度にはじまり、医師数増加に伴う医療機関の増加、高齢化社会到来による国民医療費の増加、そして医療費削減を計る国の政策など今や医療は冬の時代と云われております。

思いやりのサービス精神で
働きやすい生きがいの職場に

このようななかで、医の仁術は算術に、又医療の奉仕は、経営に変わりしたと、さきやかれておりますが、やはり医療は患者さんとの信頼関係に基づく、思いやりの心とサービス精神が根本であると考えます。

三十周年を迎えるにあたり、当院の歩んできた歴史を振り返ると共に、開設者である西能理事長より、医療に対する思いと経験の講演を頂き、職員一同が改めて医療の原点、ひいては人間の原点を再確認する機会にしたいと考えております。

これからの病院の進路には、多くの課題があります。

医療技術の向上と、思いやりの精神が永遠のテーマとなるでありましょう。四十周年さらには五十周年に向けて、職員一同のご協力をお願いするとともに、関係各位のご支援、ご鞭撻をふろうしてお願い致します。

不安を取り除く、きめ細かい活動
心の通じる全人間的な治療
なんでも相談できる体制を

ねんりん

西能病院三十年のあゆみ

目立つ草分けの業績

春雪が舞った昭和三十七年三月二十一日の開院から三十周年の“ねんりん”を刻んだ西能病院。その足跡を施設認定、院内事項、福利厚生、地域活動の四部門で辿ってみたい。病院の転機に対応したすみやかな動きを鎖い知ることができる。

北陸初の私的整形外科単科

昭和37年3月　富山市星井町で西能整形外科医院を総勢八人、病床十九床で開設

38年9月　県下の私的医療機関に先がけて救急車（プリンス）を購入

38年10月　富山市五福で西能整形外科病院を着工、木造二階建

38年10月　山中温泉へ職員旅行（毎年実施）

38年12月　西能整形外科病院を十八室、四十七床で開設

39年5月　救急病院に認定

39年7月　宇奈月町黒部猫又新黒二発電所の間組診療所を開設

39年10月　第一期増築工事着工、鉄筋三階建、塔屋一階

40年4月　第一期増築工事が完成、二十七室、七十七床で開設

40年4月　富山市星井町の医院を廃止

40年8月　新黒二発電所の間組診療所を廃止

41年12月　救急車（ジープ）を購入

患者通院用バスを巡回

42年3月　患者通院用のマイクロバス二十九人乗り）を購入、病院～富山駅～西町を巡回

42年3月　救急車（プリンス）を立山高原地帯へ寄付

42年4月　職員の親睦を深める互助会が発足

42年4月　第二期増築工事に着工

42年11月　第二期増築工事が完成

第二期増築で百十六床に

43年8月　第二期増築工事（鉄筋四階建、塔屋一階）完成、三十四室、百十六床で開設、同時に県下私的病院初のリハビリテーション部が完成

44年4月　夜間診療（16時～19時）を開始

地鉄ビルに臨時診療所を

44年7月　富山大橋橋脚沈下、国道8号線不通で富山市桜町、地鉄ビル一階に診療所を開設

45年5月　企業内保育所を設置

45年6月　富山大橋修復、地鉄ビル診療所廃止

47年3月　職員バッジを制定

47年3月　患者通院用バス（三菱中型）を購入

47年5月　基準看護特類承認

47年5月　外来及び医事部門の改装工事が完成

47年12月　外来待合室に喫茶コーナーを開店

48年2月　X線テレビ装置を設置

48年7月　各種地域の講演に講師を派遣（逐年増加）

48年4月　「奥さま社会見学」の一行が病院内を見学（毎年実施）

48年6月　牛岳スキー場に救急隊派遣（毎年継続）

48年12月　病歴室を設置して開院以来の病歴を整理分類

49年1月　

外来患者五十万人を突破

49年7月　外来患者累計が五十万人を突破

49年12月　社会福祉協議会西能基金として百万円を寄付（十回まで継続）

50年3月　西能院長が日本病院会代議員に就任

50年5月　西能基金寄付で西能院長に第一回の甜綬褒賞を授与

51年2月　外来医事部門にコンピュータ設置

入院患者五十万人を突破

51年12月　入院患者累計が五十万人を突破

52年3月　企業内保育所を閉鎖

52年3月　職員寮が完成、社会福祉法人かたかご保育園が同時落成

52年7月　古沢富美総婦長が厚生大臣表彰

52年9月　西能苑医師が六ケ月間、外地留学

第一回運動会を開催

52年10月　五福小学校で第一回運動会を開催（毎年実施）

52年12月　安全衛生優良事業所として表彰

52年12月　北陸電力有峰発電所の小見診療所を開設

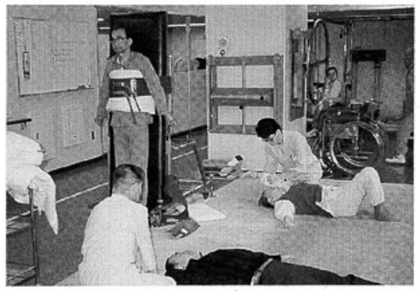
53年1月　病院長が病院の経営管理基本方針を発表

53年4月　接遇委員会が発足

医療・福祉・保健

五省会ニュースでは、二月から三月にかけて、西能病院を利用されている高齢の患者さんたちから、医療、福祉サービス、そして生きがいなどについて意識調査をしました。皆様からのご意見や、ご要望は、「高齢者を支える」新しい時代の病院に反映していきたいと考えています。回答者（六十五歳～八十五歳）は、入院が二十九人、通院が十一人の計五十人でした。（なお一つの質問に二件以上の回答もありました。無回答もありました）

院長回診に答える患者さん



社会復帰を目指してリハビリに励む

高齢患者さまの声

家庭医がいれば心強い
家族は退院後の受け入れを

「医療・福祉・保健についてのご意見や、ご要望、とくに身近かな所に起きていることをお聞かせください」

「もっと、医師と患者の相互理解と相互協力のできる環境がのぞましい」

「一人暮らしで病気になったときの不安でいっぱいだ。近くに、いつでも気軽に往診してくれるホームドクター（家庭医）がいれば心強い」

「自宅療養にきりかえてもいいのに、家庭事情などから病院にとどまっている人が見うけられる。家族の一人一人が昔のことを振りかえって、〝家が一番いい〟という老人を心よく迎え入れてほしい」

「医療機関を渡り歩く方が見受けられる。薬が重複すると、身体の害にもなり、無駄なことだと思う」

福祉サービスに地域格差が

「高齢者施設や福祉サービスなどが都市に集中しており、地域格差がある。均等にしてほしい」

「色んな老人施設やサービスの窓口チェックが煩雑だ。もっと簡単にしてほしい」

ヘルパーの充実を

「ホームヘルパー（家庭奉仕員）やボランティア活動の認識が深まってきている。自治体や関係機関は養成などに力を入れ、充実に努めてほしい。また身分や給与も見直してほしい」

「福祉施設やサービスなどの便利な制度を知らない人もいる。色んな方法で、わかりやすくPRしてほしい」

身近かなことから協力を

「近所の人が、一人暮らしの老人の家へいって食事をつくっている。そういう身近かなことから、お互いに協力していかなければならないと思う」

「老人性痴呆症の人が身近かにいる。お世話する家族の、いかにして健康に留意することが必要だ」

「老人性痴呆症の人が見うけられる。家族の一人一人が昔のことを振り返り、身体の害にもなり、無駄なことだと思う」

現設備の十分な利用を

「医療や福祉施設でまだ不十分な点が多く要望は限りないが、それよりも、現時点で、現設備を十分以上に利用することが先決と思われる。機関ばかりに頼らず、自らが努力して至難なことかを考えると、他人ごととは思えない」

その他、看護婦の増員とレベルアップを望む、訪問リハビリをふやしてほしい、身障者や高齢者に適応した乗りものがあればよい、身障者が運転できる車の開発、障害年金を増額してほしい、お金がかからず温泉に入れる保養施設―など。

心の花びらを開く歌の会

なごやかなディルームの食事風景

法話が聞きたい
西能病院に対する要望
洗面所が少ない

〔西能病院に対する要望をお聞かせください〕

「職員の皆さんが親切でやさしい」というのが一番多かった。なかには「看護婦さんの笑顔と、やさしい言葉がけが救いとなる」や「リハビリの先生の献身的な努力には頭がさがる」の声も。

また、「掃除のおじさん、おばさんの朝の元気な声が励みになる」というのもあった。

一方、「甘えもでてくる。自立厚生のため、時には叱咤激励も必要」が二件みられた。

次は洗面所と、トイレについての要望が五件ずつ。「洗面所が少ない。各病室に湯水のでる設備をしてほしい」。トイレでは「数が少ない」「病棟を男女別にしてほしい」など。

食事については、おいしい、副食がもの足りない、塩分が不足しているなど四件。「仏教講座とか法話があればよい」が三件。

また、「耳鼻咽喉科、眼科や歯科などの出張診療があればよい」「退院患者を対象に、そのご の経過通信（アンケート式）をやってほしい」「闘病体験談を聞く会を開いてほしい」「入院や通院の仲間が自発的に参加できる親睦団体があれば励みになる」「病院の回りを花いっぱいで飾ってほしい」「たまには可愛いい子供たちと遊んでみたい」「銀行の自動支払機があればよい」などの要望もあった。

そして、病院のいいところとしては、休日診療で助かっている、風呂が良く回数をふやしてほしい、健康教室がタメになっている、歌の会を楽しみにしている、通院バスの送迎がありがたいなどをあげている。

ねんりん

西能病院三十年のあゆみ

53年4月　形成外科クリニックを開設
53年4月　夕食配膳を午後四時四十五分から同六時に改善

医療相談室を開設

53年4月　医療相談室を開設
53年5月　救急車（トヨタハイエース型）購入
53年7月　西能竑医長、副院長に就任
54年4月　病院長夫妻が大平総理大臣主催の園遊会に出席
54年4月　柔道整復師研修の第一回西整会を開催（継続）
54年5月　内科外来の診療を開始
54年6月　三十台収容の職員駐車場が完成

医療法人・五省会が認可

54年10月　医療法人・財団五省会（西能正一郎理事長）が認可
54年10月　理事長夫妻が天皇陛下御招待の園遊会に出席（赤坂御苑）
55年2月　患者嗜好を取り入れた複数献立を開始
55年3月　新型通院バス（三菱ふそう、三十七人乗り）を購入
55年6月　富山市で開かれた第六回日本病院学会に参加、五演題を発表、西能理事長が副学会長（以後毎年参加）
55年11月　古沢総婦長が勲六等宝冠章を受賞
55年11月　五省会ニュースを発刊
55年12月　北電有峰発電所小見診療所を廃止
56年3月　特定医療法人に承認
56年5月　第三期増改築工事に着工、増築は鉄筋五階、一部六階建
57年4月　山本看護部長が県看護協会理事就任
56年10月　富山スケートセンターの救急医療
57年9月　増築棟が完工、既設棟の改築工事に

第三期増改築で百八十五床に

58年3月　第三期増改築工事が竣工、病床が百八十五床に
58年4月　内科を充実、内科病棟を新設
58年4月　山本看護部長が県家庭婦人バレーボール連盟会長に就任

悩みが多い家の中

一人で風呂に入れない
緊急事態の対処に不安

〔家庭復帰（退院）又は在宅（通院）で直面している切実な悩みや心配ごとはどんなことですか〕

一番多かったのは一人で風呂に入れないが十二件。つぎは家の中で車椅子が使えないが十件。

三番目が一人暮らしで身の回りのことができないが四件、家人が働きにでていて介護するものがいないが三件で、いずれも緊急事態の対処に不安を感じている。

その他、糖尿病のため食事で家族に迷惑をかける、便所が洋式でない、通院したくても交通の便が悪い、家庭にはベッドなどの設備がなく、寝起きが不自由、呼吸が困難になるのが心配など。

「両足を手術し、現在は車椅子だが、いつになったら歩けるかが悩みのタネ」、そして「少しずつ、だんだん歩けなくなるのが一番の心配だ」の訴えもあった。

〔在宅での医療、福祉サービスで関心のあるものをあげてください〕

在宅訪問が圧倒的に多く二十四件。診療、看護、リハビリのほか歯科が目立った。富山市などで歯医者へ行くことのできないお年寄り（六十五歳以上）宅へ歯医者が往診している。

金谷婦長を囲んで朝の申し送り～三階ナースセンター～

サービス部門では入浴（施設、移動を含む）が十件で一番多く、一人で風呂に入れないことを裏付けている。「近所の寝たきり老人が西能病院の入浴サービスを喜んでおられる」というのもあった。

つづいて給食が八件、ホームヘルパーの派遣と老人福祉電話および緊急通報機器の貸与が、それぞれ七件で、一人暮らしの不安がうかがわれる。

その他、車椅子、特殊寝台の貸与、寝具の乾燥、消毒サービスなど。

痴呆症にも関心
行く末を案じて

〔福祉施設で関心のあるものをあげてください〕

老人保健施設、高齢者総合相談センター、老人性痴呆疾患センターが各十件、ついで在宅介護支援センターが六件で、行く末を案じていることがよくわかる。

ほかに、ショートステイ（短期間介護する）が三件、ディサービス（一日だけ介護する）ナイトケア（夜間だけ介護する）ケアハウスが各一件。

なお、前記の質問にたいし、「今は元気で特に必要を感じない」「家族が世話してくれるので関心がない」などが三件、「施設のことがよくわからない」が二件あった。

三代の集いも

〔生きがいの福祉施策から関心のあるものと、つくってほしいものをあげてください〕

トップは仲間と語らい、入浴が楽しめる老人保養センターが十二件。二番目が手芸、生花、民謡、園芸などの趣味教室が十一件。三番目が息子や孫たちと遊ぶ三代の集いが八件。つづいて施設を一堂に集めた老人いこいの村、いろんな催しものの若返り祭り、園芸の広場が、いずれも七件。

その他、老人大学、老人健康センター、スポーツの広場、教養講座など。

「むかし楽しかった遊び、物語、手造りものを教える伝承の集いがあればよい」の要望もあった。

そのあとへゲートボール などの運動、音楽（民謡、カラオケを含む）が各五件。読書、手芸が各四件。その他お寺参り、短歌、書道、詩吟、踊り、孫のお守りなど。

「孫のところへ遊びにゆくのが一番の楽しみ」「教養講座を聞き生きる歓びを味わいたい」「何かに参加できる場があることに、喜びを感じる」「目で楽しみ心や体を動かし、人と人との話しあいが大事である」などの声もあった。

〔健康づくりや生きがいで楽しみにしているものはなんですか〕

趣味をいかすというのが大半を占めた。中でも一番多かったのが、家族での旅行（主に温泉めぐり）老人健康センター、スポーツの広場、教養講座など。

二番目が野菜やお花づくりの家庭菜園の十九件。「きれいな空気を吸い、無心で自然にとけ込める」。

面倒が見られない
医療相談室からの報告
高齢者の抱える問題

入院、通院中の患者さんや家族の方から相談をうけている中で、高齢者のかかえている問題について考えてみたいと思います。

一番多い相談は、家で面倒をみられないので何とか良い方法はないかというものです。

以前は、二世代同居という居住形態が当たり前でしたが、今は若夫婦世帯が隣居、近居し、老夫婦のみの世帯や老人単身世帯が増えてきているようです。

二世代同居していても、家人が勤めに出ていて、日中老人だけになってしまうというケース、介護者自身が高齢者であるといったケースなど様々です。

また、家の造りから、自宅の風呂に入れない、段差があったり、廊下が狭いなど、車イスが使えないといった問題もあります。

他にも、家族と上手くいかない、嫁姑の関係が上手くいかないといった悩みもあります。ライフスタイルの変化からか、お互いの意見のくい違いがあらわれているようです。

高齢者としては、住みなれた地域の中で生活を維持することを希望しておられます。一方、家族に過重な身体的、精神的、経済的負担を負わせたくないという思いもあります。

在宅福祉サービスも、ニーズにあわせて多種多様なものが市町村等で行われています。それらの内容を知らない、利用の仕方がわからないといった方々もおられるようです。

そこで、わかりやすいパンフレットなどを機会あるごとに配布すると共に、利用しやすい窓口サービスを心掛けることが大切だと思っています。

高齢化の進展に伴い、老妻や障害の著しい老人、症状が重い痴呆性老人、失禁の状態にある老人、常時介護がなければ日常生活を営めないような老人など、要介護老人の問題が一層深刻になってくると考えられます。また、その問題も、他問題と重なり、多問題化してくると思われます。

家族、親類、友人等との人間関係を保ち、介護者負担の軽減を図りつつ、家族の扶養機能を一層堅固なものにすることが必要であると感じました。

（医療ソーシャルワーカー・中井香織）

温泉めぐり
生きがいは家庭菜園も

58年4月　西能理事長が日本病院会常任理事に

集団給食で厚生大臣賞

58年10月　集団給食部門で厚生大臣賞、栄養及び食生活改善の功績
58年5月　健康ウォーク「神通川を歩こう」に救護班（以後、各種行事に救護班を派遣）
58年7月　富山女子短大生七人が四班に分れて栄養部で六日間の実習（毎年実施）
58年8月　五階和室で、一年間に死去した物故者法要。それまでは理事長宅で（毎年営む）
59年5月　西能理事長に厚生大臣賞、日本病院会で病院事業発展向上に努めた功績
59年9月　外来患者累計が百万人を突破
59年11月　第一回QC発表大会を開催
60年1月　接遇改善委員会が発足、金職員がニコニコバッジを着用
60年6月　事務職員の事務服をオレンジ色に男性はブレーザー、女性はベストスーツ
60年9月　地域住民のための健康教室を五階ホールで開催（毎月一回開催）
60年10月　氷見市で日本病院会の病院幹部医セミナー、西能同会常務理事が世話役

泌尿器科と神経内科外来を新設

60年11月　泌尿器科と神経内科の外来を新設。（現在は毎週一回）
60年11月　救急車（トヨタハイエース）を購入
61年2月　中国の医師（男性）体療士（女性）の二人が四日間、リハビリテーションで研修
61年4月　中国の金明熙医師を整形外科の研修生として受け入れ
61年4月　誕生会の会食、記念品を贈呈（毎月実施）
61年5月　北日本テレビが「午後六時」の夕食を紹介
61年6月　西能理事長が医療審議会委員に就任
61年6月　西能理事長が日本病院会の広報委員長、中小病院委員長、政治連盟副委員長、組織委員に就任

入院患者累計百万人を突破

61年9月　入院患者累計が百万人を突破
61年10月　セメントレス人工関節を開発した米人医師、ホワイトサイド博士の剣刀で人工膝関節置換手術
61年12月　基準看護特2類実施承認
61年12月　五省会理事、住栄作代議士が死去

明日につなぐ

主任以上の管理者　職場からの提言

訪問看護で健康づくりを

前任の総婦長から看護部を引き継いだのが昭和五十七年。「チームワーク、看護の質の向上、常識人としてのマナー、やさしさと思いやりを行動に」を目標に、ただひた向きに突っ走った過ぎし十年への思いが胸を熱くする。さて看護ヒューマンパワー対策は焦眉の課題である。それは職場環境、業務の見直しが必須。看護の専門性を再優先し、看護への情熱と喜びの花を咲かせたい。また地域医療として、まず訪問看護に着手、家族をも含めた健康づくりを推進していきたい。

（看護部長　山本玲子）

笑顔とやさしい気くばり

仕事中心に生きて三十数年。今改めて職場をみると、マイペース型の人生を志向するニューファミリーの世代が増え、価値感も多様化、生き方の意識も異って来たように思える。その中でいかにして仕事に生きがいを、あるいは、おもしろさを感じさせるよう仕向けるかが重要。外来では仕事だけでなく趣味、遊び、人生について共通点を見つけ共鳴感が持てるようなヒューマンスキルを心掛けて「いつも笑顔でやさしい気くばりが出来るナース」を育てたい。

（外来婦長　川西信子）

地域の人たちのために

病める人が安心して治療に専念できる「信頼と奉仕」の医療機関でありたい。そのため担当の内科外来では一同が豊かな幅広い人間性を養い、看護の本質をみきわめて、患者さんのよきアドバイザーであり、医師とのパイプ役として、思いやりのある看護を心がけたい。また病院内看護にとどまらず、地域の人々の疾病予防や退院後のアフターケアーと看護サービスを提供する範囲を広げる努力もしたい。

（内科外来主任　坪内奈津子）

日常生活への援助を

外来は病院の窓口とも、玄関とも言われ、毎日大勢の人々がこられる。短い接触時間の中で的確な看護をと心がけてはいるが、つい診療の介助や雑務に追われてしまう。忘れてはならないのは、外来患者さんにとって生活の場は家庭であり、通学、通勤、家庭生活と平行して通院していることである。高齢者も増えた。今後は患者さん一人一人に適した日常生活への援助が行えるよう、業務内容を見直し、継続看護をめざして努力したいと思う。

（整形外科外来主任　森口佳子）

継続的な教育推進が必要

就職した当時は十九床で看護婦はわずか八名。多忙な診療の中で教育熱心な現理事長は脊椎疾患の講義を計画的、継続的に行われ看護婦教育の向上に尽力された。おかげでみんなが整形外科看護婦としての誇りに満ちた職場だった。それを思うにつけ、院内外の研修への参加、継続的な教育推進の必要を痛感する。看護部の目標である「ひとり一人が精鋭」であるよう個々の技術と資質のレベルアップに努め、それを結集して全体の看護力向上をめざしたい。

（二病棟婦長　津田勝美）

日々、問題意識を持って

急性病棟で手術を受ける患者さんは、若い十代の人や、うんと高齢の人もいて看護婦との世代の相違もあろう。しかし、その中でも出来るだけ患者さんの心や体を理解し、その人にあった看護を提供していきたい。そのために研修参加はもちろん、読書や絵画、音楽鑑賞等の幅広い趣味と豊かな心を持つよう心掛けたい。主任としては、日ごろの雑務に流される事なく日々問題意識を持ち、一つ一つチーム全体で話し合いながら解決していきたい。

（二病棟主任　上不雅子）

思いやりの心を　朝礼でナイチンゲール誓詞を唱和

人間としての自己成長も

手術室、内科外来、整形外科外来の勤務を経て久しぶりに急性病棟の勤務となり、働き易い職場環境作りとチームワーク作りに努力している。病棟主任としての多忙な業務はあるが、その役割を果たすには何よりもスタッフ全体が一丸になることが大切。

患者さんによりよい看護が提供できるためには全員が「看護婦として」だけでなく「一人の人間として」自己の成長を重ねていかねばならないと思う。

（二病棟主任　奥平美和子）

個を活かす看護管理を

看護婦不足は深刻な問題だが、看護職の「3K」イメージや、「人手が無いから」「忙しいから」出来ないという言葉を返上、与えられたスタッフの活用を考え、申し送りの改善、定型業務の効率化、他職種との連携で業務の合理化を図りたい。そうすることで「大変だけど」、「大切で」「頼りになる」仕事だと「3T」イメージを自覚出来、「魅力ある、きれいな、活気ある病院」をめざしたい。婦長としては一人一人が精鋭として看護管理」に目をむけていきたい。

（三病棟婦長　金谷智恵子）

物品と時間管理に留意

看護部の目標である「一人一人が精鋭として」病棟の看護サービスに徹するため、看護雑誌等で情報を得て知識を広め、技能を研く努力が第一。また主任としては、患者さんの急変に対応出来るよう器具、書類を整理整頓しておく「物品管理」、また職場と私生活が車の両輪となってスムースにいくような「時間管理」に留意したい。

自分達の選んだ看護の道を継続出来るエネルギーを育てていくことが大切だと思う。

（三病棟主任　中山栄子）

恕（じょ）の気持ちで看護を

慢性疾患病棟の担当主任として、私は「恕」の気持ちで看護をしたい。孔子は「恕とは自分がして欲しくない事は人にしない、自分がして欲しい事は人に行うことである」といっている。日常業務がややもすれば惰性に流されがちになるが、今この人に何が必要なのかを見極めて看護する努力とともに、高齢化する患者さんにチームメンバー、医療チーム、そして家族と共に英知を駆使して心豊かな入院生活を送っていただく努力を重ねたい。

（三病棟主任　関　待子）

目標は自主独立の精神力

最近看護婦不足が叫ばれているが、看護を生涯の仕事と決意して、看護学校に入学する人は何名いるだろうか。努力して学校を卒業しても、結婚、出産等で退職する人が多い。私が看護婦を目指した頃は元気で働けるまで続けていこうと、誓う人が大部分で、家族の協力のもとに勤続してきた。それを思うと、今のナースに必要なのは自分の仕事に誇りと使命感を持ち看護に情熱を傾けて精進する積極的な姿勢であろう。自主独立の強い精神力を養うことを目標にしたい。

（四病棟主任　三原八重子）

創造性を努力目標に

医療の高度化、専門化、機械化、そして人口の高齢化が進むにつれ、看護の量的な拡大とともに質的に高度化が要求されるようになった。このため手術室担当主任としては患者さんの安全への細かい神経と気配りはもちろん、チームワークで手術を円滑に終了させる任務に加えて、看護の、より高度な専門的知識、技術の熟達、さらに一歩進んで、創意工夫を生む「創造性」を努力目標にしたい。

（手術室主任　岩城真由美）

ねんりん

西能病院三十年のあゆみ

61年12月　西能副院長が日本整形外科学会からリュウマチ医に認定
62年1月　西能副院長が日本体育協会公認のスポーツドクターに認定
62年3月　電気ビル五階ホールで開院二十五周年記念式典と祝賀会。県民会館ホールで、竹村健一、行天良夫両氏の講演会
62年4月　入院患者さんが通院バスで松川べりなどを花見遊覧（毎年実施）

地域医療チームを編成

62年4月　地域医療チームを編成、在宅診療、訪問看護活動などを開始
62年4月　病棟を急性（二階）と慢性（三階）に分離
62年4月　スポーツ外来を開設
62年7月　五省会全国管理室長に中永久光氏就任
62年8月　西能基金十回目の百万円を西能理事長から横山県社会福祉協議会長に贈呈
62年8月　旧丸八跡の町内納涼大会に参加、健康教室を開催
62年10月　入院患者さんが五階ホールで月見の会（毎年実施）
62年10月　五階ホールで第一回映写会
62年10月　「87とやま健康フェア・健康とスポーツフォーラム」に相談コーナなどを設置
62年12月　入院患者さんがクリスマスの会（毎年実施）
62年12月　「24時間テレビ」チャリティー委員会から入浴専用車の贈呈

外来休日診療がスタート

63年4月　日曜、祝日を返上した外来休日診療（内科、整形外科、リハビリ）がスタート

入浴車サービスを開始

63年4月　入浴専用車が地域医療チームの担当で寝たきり老人のサービスを開始
63年4月　闘病記二十八篇を収録した「その馨（かぐわ）しきあゆみ」を発行
63年5月　職員勤務を四週六休制に
63年7月　西能結副院長が二代目院長に就任
63年8月　病棟医事部門にコンピューター設置
63年8月　24時間テレビで入浴専用車の活動状況を紹介（毎年実施）
63年10月　西能理事長が米国、カナダの医療現況を視察
平成元年2月　五省会広報委員会（中永久光委員長）が発足、委員五人
元年2月　三階慢性病棟で歌の会などを開催

大山氏が内科部長に

元年4月　大山馨氏（前県立中央病院内科部長）が内科部長に就任
元年4月　外来医事部門にコンピュータ設置
元年6月　89いきいき健康フェアに入浴車出展
元年12月　健康教室が地域に進出、富山市寺町公民館で、西能理事長が「腰痛について」
2年1月　五階ホールで第一回院内研究発表会（毎年実施）
2年2月～4月　五福校下で地域医療に対する意識調査、結果を五省会ニュースで発表

能海氏が画像センター長に

2年7月　能海勲氏（前井波厚生病院長）が画像センター長に就任
2年8月　MRI及びCTを備えた五省会画像センターが稼動
2年10月　西能理事長が砺波市の国道で乗用車にはねられ、砺波総合病院に入院

二つの新コースで通院バス

2年12月　神通川以西の二つの新コースで通院バスを運転
3年2月　ヘルスケアショップ「シーブ」がオープン
3年4月　西能理事長が診療に復帰
3年4月　五省会評議員、大上紀美雄氏が県議選（富山市、定数13人）で2位当選

医薬分業がスタート

3年5月　医薬分業がスタート、病院で処方せん、院外薬局で調剤
3年6月　社会福祉法人・梨雲福祉会（西能正一郎理事長）の特別養護老人ホーム「梨雲苑」（大山馨施設長）が開苑
3年11月　五省会理事米田寿吉氏が富山市敬功労者、山本看護部長が富山市表彰を受賞
3年11月　西能理事長が広瀬県社会福祉協議会長から特別感謝状を受賞、社会福祉の発展向上に寄与

明日につなぐ

院内教育を再構築

新しい世紀を迎えるに当たって、全員が一致団結して取り組むことが三つある。

第一、地域に根ざし、開かれた病院を実現するために、よりよい医療を提供する。

第二、短期・中期・長期の経営計画を立案し、健全な経営をおこない、病院を着実に発展させる。

第三、医療人としてのプロフェッショナルを目指して、院内教育制度を再構築し、プロ意識を有した、少数精鋭主義で対応をしていく。

（事務部長　渡辺裕之）

病気の知識を身につける

医事課職員として、各人が何をしなければならないか、もう一度考え直してみる必要がある。医事課の業務はきわめて幅広く多彩で、中でも特に重要な保険請求業務を正確に行うには、点数表の解釈をマスターする、病気についての知識や検査内容、治療のプロセスなどを身につける、医師とのコミュニケーションをよくして、より正確な保険請求業務（レセプト作成）に努力して行きたいと、おもっている。

（事務部医事課主任　安川敏一）

オルゴールを美しい音色に

私が属している施設係は常に生命にかかわる医療現場での第一線の仕事ではない。しかし私自身はこの仕事が病院という巨大なオルゴールの中で多くの歯車の一つとして確実に動くことによって、よりよい発展という美しい音色をかなでることが出来ると信じている。だから、私の歯車がさびついたり、かみ合わなくなったりしないよう、常に点検し病院というオルゴールに常に心をそそぎ続けて行こうと思う。

（事務部施設主任　石倉喜一）

生きた物品の使い方を

昨今の医療を取り巻く環境は厳しくなってきており、病院の倒産という言葉も耳にする事がある。人件費に次いで大きなウェートを占める医療材料、医療消耗品等の物品のムダをいかに少なくするかが経営面からも大いに指摘される。物品の購入から使用までの善し悪しは大きな影響が出てくる。そのために職員一人一人がムダのない生きた物品の使い方をしなければならない。用度係としての責任を持った業務に精を出して行きたい。

（事務部用度主任　宮尾英新）

患者さんの安全の配慮を

増改築のあと十年近くたったので、建て物などに小規模の修理や塗装が必要となっている。建物の維持、改善、管理に関しての既存のマニアルを見直して、計画的に取り組んでいきたい。また日常清掃と定期清掃も計画的に実施し、院内が常時、清潔を保つよう心掛けたい。そして患者さんの安全を守り、安静療養を妨げない、きめ細かい配慮をしていきたい。

（事務部施設副主任　田中行久）

高齢者の治療に生きがいを

リハビリだけを紹介すると、二十四周年を迎える。当時との違いは利用する患者さんの年令層である。当時は先股関、斜頸等の乳幼児層、そして骨折、脊椎外科の若、中年層が多く、その治療に情熱をそそいだ。今は乳幼児層に代わって高齢者の方の利用が多くなった。私達はそのニーズに答え、これらの方々の治療に真の生きがいを持ち、情熱を燃やして頑張る事こそ、だいじであると思う。

（リハビリテーション課長　荒井紀夫）

より一層のサービス向上へ

リハビリテーションは入院、外来を合わせて毎日二百人余りの患者さんに利用して頂いており、スタッフは九人で業務を行っている。現在は四週六休体制で休日診療も実施しているが、社会的に週休二日制が叫ばれ、今後当院も四週八休、完全週休二日制へと移行することが予測される。そこで、患者さんへのサービスが低下しないよう、またより一層サービスの向上を図るように、各人のプロフェッショナルとしての質の向上を取り組みたいと思っている。

（リハビリテーション主任　飛田　勉）

スタッフの技術向上を

検査部門によせられる責任はますます大きくなっている。当院においてもMRIなど高度医療を支える検査機器を導入し、五省会画像センターが発足した。他病医院からの検査依頼も増えて、当院の検査機器であるりながら地域全体の共有財産との認識が深くなってきた。当然、院内では需要のなかった検査への対応も要求され、スタッフの技術向上のための研修手配や県内各病院とのコミュニケーションに力をいれたいと思う。

（レントゲン室課長　鐘　貫）

鬼手佛心　待合室にかかげてある額

情報量の高い画像を

現在の医療における社会情勢は、労働時間の短縮、人手不足、医療費抑制など厳しさを増している。これらの問題点をこれから十分に検討する必要性がある。それよりも先に、いかにして患者さんに、当院を利用して頂けるかを考える事が必要である。その一手段として、最新機器のコンピュータ断層撮影装置（CTスキャナー）磁気共鳴画像診断装置（MRI）を活用して情報量の高い画像を提供する事により、当院を利用して頂けるよう努力したい。

（レントゲン室主任　鐘　政行）

病室に出向き薬の相談も

当院では、昨年の五月から外来患者さんに対して薬の代わりに処方箋をお渡ししている。これによって、薬剤部では外来調剤が皆無になり、提供できる患者さんへのサービスも、そのウエイトを外来から入院へとシフトしていくことになった。

今後は、病室へ出向き薬の相談に応じたり、副作用の防止のため、薬歴管理を徹底するなどよりよい医療が提供できるよう業務の展開を質的に変えていこうと思っている。

（薬剤部主任　上田謙一）

医療情報をキャッチして

患者さん給食の「冷たい、まずい、早い、遅べない」の苦情はまだ完全に払拭されていない。一日も早く改善しなければと思う。

また高齢化という社会的な背景からも病気の予防、治療という面からの食事を考えると、患者さん個人の医療情報をきめ細かくキャッチし、患者さんがおいしく食べていただけるよう味付け、盛り付けに細心の努力をし、よりよい食事を提供したいと思う。

（栄養部主任　二口雅子）

自発的な行動を最大限に

一、硬直化、マンネリ化を排し、清新溌剌の気風を醸成する。

二、職員の自発的な行動を最大限に引き出すよう、柔軟性を持って運営する。

三、権限の委譲と責任の明確化により、いきいきとした組織に変革する。

四、当面する課題は重点を絞って、果敢に実行する。

五、「日々に新た」変革へのたゆまぬ意志と行動で、医療冬の時代の難局を乗り切りたい。

（経理部参事　光里尊蔵）

アンケートの分析処理も

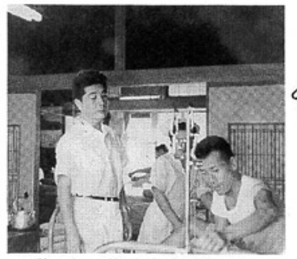
経理は経営活動の成果報告のための財務会計と、経営管理を行うために必要な管理会計の二つの面より成り立っている。そのため経営活動を計数的に把握し必要な情報の収集を行わなければならない。院内には直接、経理とは無関係な情報データが多くある。経理の機能アップをはかって、情報処理能力を高め、アンケートなどのデータ分析処理なども行えるようにしていきたい。そのことが、また経営管理に役立つと思う。

（経理部課長　平井幸二）

思い出アルバム

「昭和三十四年秋から整形外科医長として勤務した当時の農協滑川病院での仕事は、実りの多いものであった。私には始めて執刀する手術が殆んどやりすぎや失敗なども無かったし、地域の皆様に可愛がってもらった。その〝農協病院〟の看板を外して、自分の力を世に問えば、どんなことになるだろうかと、考えたのが開業のきっかけであった。今考えてみれば、卒業してから九年目、臨床医として未だ尻に殻がくっついている青二才がよくもまあと、今更赤面の至りである。そして、そのような男に身体を任せて下さった患者さん方に満腔の謝意を表するものである。

結局、開院してから経験させていただいた事で今日の私の医師としての識見を全面的にバックアップしてもらったものと、今でも感謝している」（西能理事長の述懐から）


診療室の西能院長（37年）

患者さんのご協力に感謝
〝自分の力を試したかった〟

人の世の縁（えにし）
坂本重一

三十七年当時の坂本さん

「オーイ、約束通り患者第一号がきたぞー」

西能医院の開院の日、即ち三十年前の昭和三十七年三月二十一日の朝、宇奈月からタクシーで駆け込んだ。

黒のドスキンの礼服姿だった招待客の高橋喜美雄先生（当時、農協高岡病院整形外科医長）におんぶされて、日の丸の出ている玄関に入った。

お陰で、名医二人に応急手当をしてもらい、次の日に農協高岡病院に転院して手術を受けた。私が場長をしていた工業試験場が高岡にあったためと思う。

折角の患者第一号を〝トンビに油揚げ〟と思われたか、開院当日のテンヤワンヤの中でホッとされたかは知らない。その日の医院の様子は全くおぼえていない。

私は、通産省のお客さんと要巣野にスキーに出かけ、アキレスけんを切ったが、職務熱心とサービス精神旺盛から、その夜は宇奈月温泉へ。足首はボンボンにはれ、痛みも強く、眠れぬまま夜明けを待っていた―。

実は、私も開院式に招待されていた数少ない客の一人だったのは、西能理事長との古い出会いと長い縁とによる。

初の出会いは、終戦高校（旧制）生特有の汚い制服姿の紅顔可憐な富山高校剣道部の西能君が、同じ剣道部の先輩である私を訪ねてきた。

戦後、G・H・Q（占領軍）が武道を禁じていたが、西能君がマネジャーとして、ひそかに部活動を続けているという。大いに頼もしく敬服もし、何度か見に行った。

次は工業試験場時代。

〝患者第一号がきたぞー〟
出会いはバンカラ西能剣士

二年後はどの或る日、始めたプラスチックで義肢義足を試作した時、医局にいた西能医師と顔を合わせた。そして医局の花見や一泊旅行にも何故か仲間に入れてもらった。

化学屋だった私と高橋先生とで、当時世に出

やがて、農協滑川病院を経て、独立開業すると聞き、「どうせ初めは患者も少なく大変だろうから、患者として協力する」（勿論冗談です）と、言っていたことから、書き初めの第一声になったのである。

その後も、専門の医療はもとより、時には オデキの処置まで、ずーっと、お世話になっている。

私は理事長に、医者としては勿論、それ以上に、その発想の素晴らしさ、経営理念、五省訓を基調とする哲学に特に敬意を払うと共に、実業家としての能力にも大きな賛辞を贈りたい。

つくづくと、良い人と良い縁を持ったものと思っている。（五省会評議員）

障子が見える

病室（星井町）の津田勝美さん（38年）

第一号の救急車と職員第一号の梶井富美子さん（38年）

診療室（星井町）で。後列㊧が久米信子さん、後列㊨が川西信子さん（38年）

職員たちが有峰にハイキング、まん中が石倉喜一さん（38年）

建物の移り変り

富山市星井町で西能整形外科医院開設。木造二階建（37年3月）

富山市五福で西能整形外科病院開設。木造二階建（38年12月）

第一期増築工事が完了。鉄筋三階建、塔屋一階（40年4月）

第二期増築工事が完了。鉄筋四階建、塔屋一階（43年8月）

↑開設当時の院内保育所の可愛い子供たち（45年）

完成当時の広々としたリハビリテーション→で訓練に励む患者さん（43年）

心に残る思い出

〝ハンサム先生〟に変身

ホコリでいっぱい、戸障子は破れ放題の幽霊屋敷（空き医院）の掃除が大変だった。院長も勇ましい鉢巻姿でぞうきんがけ。それが白ワイシャツにチョウ・ネクタイの〝ハンサム先生〟に変身されたのにはびっくり。（OB・堀井富美子、37年組）

両手を合わせる患者さん

高校を卒えてすぐ看護婦見習いで住み込んだ。午前中は、富山市の准看護学院に通った。初めは診察室の掃除と、院長のあとをついて歩くのが仕事。夜おそく回診にでかけると、患者さんたちは「ありがたいことだ」と、両手を合わせていた。院長は、よく働き、よく遊ぶスーパーマンだった。（OB・久米信子、37年組）

活躍した第一号救急車

私が運転した第一号の救急車はプリンス（ライトバン）を改造したもの。当時（38年）は珍らしく、新聞に写真入りで紹介された。出動回数も、だんだんふえてきたが、山手の工事現場が多かった。院長の〝先見の明〟に感服した。院長は患者さんを大事にして気持ちをよく摑んでおられた。（事務部・石倉喜一、37年組）

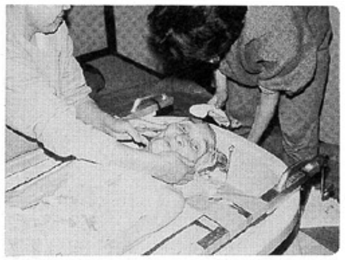
看護婦詰め所で交流を

増改築の都度、ナースセンターも様変わりした。私が勤めた三十八年一月ごろの看護婦詰め所（当時の呼び名）は病棟廊下の一角にあり、職員と患者さんや家族の気軽なコミュニケーションの場となり、交流を深めていたのが懐しい。院長は面倒みがよく、人を引きつける魅力をもっておられた。（看護部・津田勝美、38年組）

命令一下、夜遅くまで

院長は、エネルギッシュに診療にあたり、また職員の教育にも熱心だった。私たちは命令一下、夜遅くまで、よく働き、家内職場のようだった。それにしても、当時のおんぼろ木造建てや、玄関に並べられた薬ぞうりを、誰が想像できるだろうか。（看護部・川西信子、38年組）

地域にとけ込む


入浴車サービス　〝気持ちいいね、有難いことで……〟

休日診療　孫を連れ、息子の車で来院のおばあちゃんも

訪問看護　和やかなあいさつのあと、血圧と脈拍を計って、ひと安心

講演　西能理事長が「生命あるかぎり」を

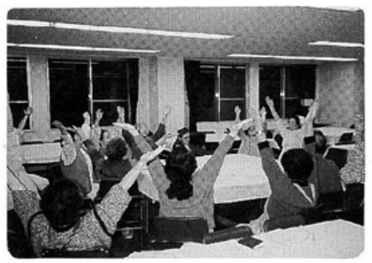
救護班　牛岳スキー場でケガをしたスキー客の応急手当

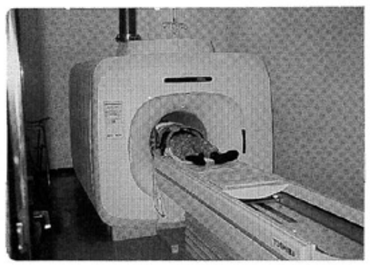
現在の建物　第三期増改築工事で鉄筋五階建、塔屋一階（58年3月完成）玄関横鉄筋二階建はシーブ（平成3年2月オープン）

通院バス　二台で三つのコースを巡回

救急車　常時二台が待機して出動OK

介護用品　シーブの二階で展示販売、一階は売店、喫茶店


健康教室　病気も老化もはねのけて、のびのび体操、山本看護部長が指導


画像センター　直接描写のMRIで検査をうける患者さん

心に残る思い出

忙しい日々を助け合って

四十一年一月に勤めた当時の医療事務は六人（現在の医事課は十一人）で、初めは不安だったが、諸先輩から温かい指導をうけたのが嬉しかった。手動の電話交換台につくのも仕事の一つ、食器洗いや配膳の応援にもかけつけた。忙しい日々をみんなで助け合い、職場は活気に満ちていた。（医事課・安川みどり、41年組）

可愛い吸血鬼がきた

四十一年三月に勤めた当時の検査室は、ふ卵器、乾熱器、遠心器そして顕微鏡の小じんまりとした部屋で一人（現在は三人で機器類は大幅に増えた）だった。耳朶から採血のため病室へ行くと、男の患者さんから「かわいい吸血鬼がきたぞ」の声もかかり、常にコミュニケーションがとれた。（検査室・山口明江、41年組）

立位ブッキ台が威力を

四十三年六月に腰椎機能撮影を目的とした立位ブッキ台を考案してレントゲン室に設置、腰椎の診断や検診に威力を発揮した。当時このような装置はどこにもなく、見学や問い合わせが相次いだ。この装置で撮影したX線写真が医局の研究に役立ち、脊椎専門病院としての地位確立に貢献した。（レントゲン室・鎌貫、39年組）

リハビリにホッケーを

四十三年八月に開設したリハビリテーションの広さを活用して、胸髄損傷の患者さんのスポーツ訓練に、床上でのホッケーをとり入れた。患者さんも、木をけずってステックを作り、車椅子でゲームに熱中した。そのエキサイトぶりや終わってのすがすがしい表情が思いだされる。（リハビリテーション・荒井紀夫、43年組）

新厨房で二重の喜び

第三期増改築で厨房も改築することになり、五十七年九月、外で仮設調理場をつくった。それがせまくて、よくぶつかりあった。寒さに向かっていたので食事が冷めないように大変苦労した。そして新厨房ではりきっていた五十八年十月に集団給食で厚生大臣賞を受け、二重の喜びにひたった。（栄養部・二口雅子、46年組）

活性化の起爆剤に

院内研究発表会

一月に五階ホールで開かれた第三回院内研究発表会で、日ごろの業務の中から研さんを積んできた十二演題が発表された。この中から次の二演題（要旨）をまとめてみた。西能院長は「三十周年記念年間の先駆けとして、院内活性化の起爆剤になることを念願する」と挨拶した。

介護者が仕事で不在

在宅療養できない理由

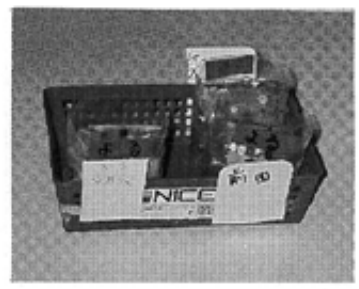
（長期入院患者の現状と今後の展望）高齢者の長期入院（六カ月以上）が六十％以上になっている。そこで、二十五人の患者さんと家族から、かかわり状況を調査した。

そのうち、在宅療養を困難とする理由として次の三点が多かった。①介護者が仕事をもっている九人②自宅での容体急変が不安五人③介護者が病弱四人。

これら家族の抱える問題に対しては、訪問看護や在宅医療チームのきめ細かい介護が必要である。また自宅療養に切り変えるため、入院中から在宅介護へ向けて患者さんや家族への指導、働きかけが必要であることを痛感した。（看護部三階東チーム、発表者、長谷川恵子）

少なくなった飲み忘れ

食堂のテーブルに薬箱を



（高齢者の与薬の工夫）入院高齢者の薬の飲み忘れや紛失状況を調べたところ、痴呆の患者さんがほとんどであった。

そこで、患者さんとも原因を検討し、病室の手渡し与薬から、食堂のテーブル上に氏名入り与薬箱を置いての服用方法に変更した。

その結果、患者さんの服薬に対する意識づけが図られ、服薬を忘れることが少なくなった。服薬が正確に行われたか、どうかが確認ができ、患者さんひとり一人に適切な対応ができるようになった。また与薬を一日三回から一回にしたことで、マンパワーの節約と業務の改善にもつながった。（看護部三階東チーム、発表者、味噌町子）

その他の十演題と発表者はつぎのとおり。

「百％院外処方箋を発行して」上田謙一（院外処方箋発行推進委員会）「院外処方箋発行による薬剤在庫量及び診療行為別収入割合変化と患者動向について」高田真紀子（薬剤部）「MRにおける画質向上の検討」谷川寿男（レントゲン室）「院内落下細菌の状況について」山口明江（検査室）「疼痛出現時期と術後の回復状態について」塚田克雄（リハビリテーション）「膝関節注射後の止血バンドの改善を試みて」奥平美和子（整形外科外来）「個別性を生かした手術患者のオリエンテーションの充実」高松亜紀子（看護部二階東チーム）「入院時オリエンテーションの再検討～イラスト入り入院案内を作成して～」花岡喜美子（看護部二階西チーム）「訪問看護連絡表活用を試みて」山崎敦子（地域医療チーム）「手術における不安軽減への一工夫～音楽を導入して～」上不雅子（手術室チーム）

病院だより

一月

四日＝仕事はじめで院長が、互礼会で理事長が年頭所感。

十六日＝新成人の上田かおりさん、内呂千春さん、波川満喜さん、村井深雪さん、森千秋さん、高山喜代美さんの六人に院長から記念品を贈呈。

二十一日＝理事長が県教育記念館で「生きているあかし」を講演、主催は県高校々長会。

二十八日から＝五階ホールでNTT富山支店情報サービス企画担当の電話マナー講習会を五回開催。

三十日＝山本看護部長が大島町福祉センター（富山市綱引協会主催）で「応急処置について」講演。

二月

理事長が包帯法を

四日、十八日＝理事長が五階ホールで県教育委員会主催の「包帯法」を指導。

八、九日＝第25回全日本バレーボール選抜女子リーグ富山大会（県総合体育センター）に救護班。

九日＝中永企画・管理室長、山本看護部長が在宅ケアセミナー（東京）に出席。

十四日＝理事長が小杉福祉会館（小杉町教育委員会）で「いのちあるかぎり」を講演。

十五日＝理事長が奥田公民館で「腰痛とのおつきあい」を講演、奥田地区婦人会が主催。

十六日＝西整会が太閤山温泉で研究会、院長が「骨粗鬆症の診断と治療」を講演。

二十五日＝理事長が県教育文化会館（県農地事務所）で「生きているあかし」を講演。

永年勤続表彰者

▼特別表彰（二人）石倉喜一、津田勝美▼三十年（一人）西能綾子▼二十五年（一人）三原美樹雄▼二十年（三人）西能竑、宮尾英新、岩城真由美▼十五年（三人）三ツ松節男、吉村靖、川西信子▼十年（一人）山本玲子▼五年（十一人）杉田正治、平井幸二、刑部和子、吉田美和子、野原かつみ、小松恵子、河辺信子、松田昌子、森田貴子、高島小夜子、山田真佐子

診療体制のご案内

休日診療

（日曜日・祝日）

午前8時30分～午後5時

- 整形外科
- 内科
- リハビリテーション科

平日診療

（月曜日～土曜日）

整形外科
午前 8：30～12：00
午後 4：00～7：00

スポーツ外来
火・土曜日
午後 4：00～7：00

内科
午前 9：00～12：00
午後 3：00～5：00
（火・金曜日は7：00）

神経内科外来
木曜日
午後 2：00～5：00

在宅看護・診療
木・金曜日
午後 1：30～4：00

リハビリテーション科
午前 8：30～12：00
午後 1：00～7：00

泌尿器科外来
土曜日
午後 1：30～5：00

栄養指導（糖尿病 ウエイト・コントロール）
月曜日～土曜日
午前 10：00～11：00

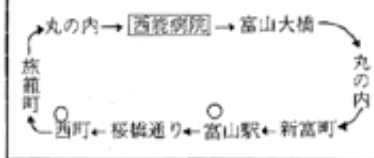
救急出動OK

もし、救急車が必要でしたら、連絡して下さい。お迎えに上がります。常時2台待機しています。

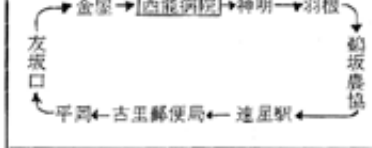
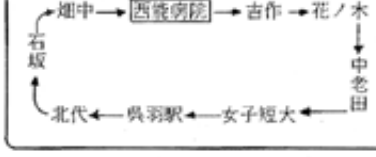
通院バスのご案内

月曜～土曜　午前運行
（日曜、祝日は休み）
○印は常時停留所、その他、臨時停車します。

①富山駅・西町コース



②婦中・長沢・金屋方面



③呉羽・中老田・北代・田刈屋方面